

学校だより

平成27年  
2月号 No. 29



# ふれあい

## 開校4年を目指して

学校長 渡辺 正彦

3年数ヶ月前の私は、横浜市立さつきが丘小学校の再任用校長でした。この学校で正規を含め9年間の校長としての職務を終了する直前にあの震災は発生しました。余震に怯える子ども達と慌てる職員を前に必死に冷静を装い、指示を出したものでした。

「横浜みどりの学校ひまわり」が開校したのはそんな忘れることの出来ない年の6月でした。教師になって以来ずっと持ち続けていた「学校になじめない子ども達」への思いが私塾ひまわりの開校の決意でした。現役校長の頃、トラブルを起こした子どもがよく担任に連れられて校長室に来ました。担任はまるで校長の権威や威厳を背景に子どもに迫るようで、そのような指導方法は好きではありませんでした。子どもを前に担任の頼みを断ることも出来ずあたりまえの指導をした後、「あなたのやった事は今はいけない事です。よく反省しなさい。だけど十年後はどうかわかりません。」付け加える事にしていました。勿論、普遍的に悪い事があるのは事実です。私がこの言葉を付け加えるのは、教師として経験した事が原因です。28歳で教員になるまで、大学を出た私は多くの職業を経験し、挫折を繰り返していました。行き着く果てに目指した教員試験の面接官から「君、この6年間のブランクは取り返しがつかないよ」と言われて、「自分の社会経験を教育に生かします。」という試験官は声を荒くして「みんなそんな綺麗事を言うがそんな事できるわけがない」と私をにらみつけました。

あれから30数年が経過したころから、民間出身校長が導入され、教員がわざわざ民間の会社に研修に行くようになりました。人間の価値観や評価基準の多くが時代と共に変化して行く事を肌で感じました。

「枠からはみ出た子ども」「標準や平均から距離をおく子ども」「何らかの理由で学校になじめない子ども」、そんな子ども達が今本当に理解され、評価されているのだろうか。10年後、価値観や評価の基準、社会の仕組みが変わった時、彼等こそ社会の救世主になるのです。

精米していない玄米の子ども、もみ殻の子どもの可能性を探りたいと思います。そのためまず彼等がより多く地域の人々に接して、身近な人々が彼等を理解、支援して欲しいものです。「横浜みどりの学校ひまわり」は、妊婦に薪割りの場を提供するなど胎児を含むあらゆる子ども達と保護者を支援します。

地元自治会、商店会、青葉区社会福祉協議会、パル・システム様をはじめ多くの方々に支えられて開校4年を目指したいと思います。

# 2014年5月～2015年1月までの行事から

5月2日(金)「ひまわり焼肉大会」



5月29日(木)「ひまわり総会」



6月14日(土)「ひまわり3周年流しソーメン」



7月14日(月)「ひまわりリフォーム」



7月12日(土)「ひまわり3周年バザー」



10月13日(月)「南のちよい呑みビアガーデン出店」

10月4日「ミニ運動会」



11月15日(土)「芋掘り大会」



12月23日(火・祝)「ひまわりもちつき大会&ミニバザー」



2015年1月10日(土)「おしるこ大会」



1月17日(土)第5回「どんど焼き」



2月8日(日)「あおば・未来へつなぐ食と農のフォーラム」



「妊婦さん薪割り体験」・「空き缶回収」

